

近世哲学研究

第 13 号

《論文》

根拠律批判から理性批判へ —— 石川 文康 1
—— 「ア・プリオリな総合」の起源をめぐって——

ショーペンハウアーにおける
〈物自体としての意志〉概念の導入 —— 多田 光宏 20
—— 意志の否定と道徳の両立のために——

《書評論文》

三つの『純粹理性批判』新訳 —— 佐藤 慶太 36

2006

京都大学
近世哲学研究刊行会

編集後記

本年も『近世哲学研究』をお届けする時期になった。毎度のことながら編集事務に携わってくれた方々の労をまずはねぎらいたい。

去年もこの「編集後記」に書き、いろいろな機会に述べていることであるが、我が国における哲学研究、とりわけ哲学史研究をとりまく環境はますます厳しくなっている。今回はもう繰りかえさないが、そのような状況にひるむことなく、近世哲学史研究の価値と使命に確信をもって突き進んでいきたいと思う。今回は、私が最近経験した、われわれの指針となりわれわれを勇気づける二つの事柄の紹介をもって「編集後記」にかえたいと思う。

私はこの三月、パリ第一大学（パンテオン・ソルボンヌ大学）に客員教授とし招かれ、一ヶ月間、哲学の講義と講演をしてきたのであるが、その内容はさておき、その間、この大学でなされている、古代から現代までの哲学史の授業の数の多さに圧倒された。フランスも、日本同様、「科学技術」の制覇とグローバル化がもたらす「市場原理」の浸透に直面しているのであるが、古代から現代に至る哲学史研究の堅固な伝統は、ソルボンヌの殿堂のように、まったく揺るいでいないのである。この体制は、リセ（中等学校）の最終学級やバカロレア（大学入学資格試験）において哲学が必須であるという教育体制に支えられている。フランスでは（そしてヨーロッパでは）、哲学が文化の基盤であり、その

研究の基軸は哲学史研究であるということが、国民のコンセンサスとなって浸透しているのである。

このことを示す端的な事態に私は、パリに書いて、翌日、ソルボンヌ大学に足を運んだときに出くわした。かつてはカルチエ・ラタンを象徴するような存在であり、サン・ミッシェル大通りとソルボンヌ広場に面した、フランス有数の書店 PUF の大きな店舗が、服飾店に取って代わられ無くなっていたのである。これに対して、同じソルボンヌ広場の対極に位置する、有名な哲学の専門書店ヴランの方は拡張しつづけており、店内には、圧倒的な数の哲学の書物が、古代から現代に至る哲学者の名前に従って配置されていた。商業ベースにのって多くの分野の本の出版に乗り出した PUF の店舗が無くなり（ただし代表的なシリーズは刊行され続けることである）、哲学書のみを出版するヴランが健在で拡張しつづけているのを見て、フランスにおける哲学の伝統の強固さを象徴的に示す事態として感心させられた次第である。

われわれは、哲学思想の進展において大きな役割を担い続けてきているフランスの、このような状況をモデルとして念頭におき、近世哲学史研究に確信をもって邁進したい。今回は、去年、非常勤講師として集中講義にきていただいた石川文康先生から御高論を頂いた。石川先生には厚くお礼を申しのべたい。

(K)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（二九九四）

祝辞 酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——
カントと初期フイヒテとの接点 北岡 武司

義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄
—— 功利主義との対比 ——
対象と反省 山脇 雅夫
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——

第二号（二九九五）

カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂
—— 「世界」概念導入のための
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論 早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた
ヘーゲルの試み ——

工学はどういうタイプの学問か

信仰の情熱とその逆説 齊藤 了文
田中 一馬

—— キェルケゴール『おそれとおののき』
におけるアブラハム解釈をめぐって ——

ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志
—— 意識の二義性と意識の転換 ——

第三号（二九九六）

『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ 福田喜一郎

—— 理性を制度化しようとした
カントの試み ——

デカルトにおける愛の区別について

未済の人倫 武藤 整司
石田あゆみ

—— 『精神の現象学』主—奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

第四号（二九九七）

一本の綱 (Seil) としての人間 吉川 康夫
—— ニヒリズム状況下に於ける
人間と社会の問題 ——

デカルトの懐疑について 安藤 正人

—— 『省察』の「反論と答弁」を
資料として ——

市民と国家の媒介 小川 清次

—— 「国民」形成の二側面 ——

『存在と時間』に於ける可能性概念の
多義性について 橋本 武志

自然主義的存在論の隘路 次田 憲和

—— フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——

第五号（二九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司
—— デカルト的行論の一考察 ——

デイルタイに於ける客観的精神の概念
について
折橋 康雄

ハイデガーの他者論
安部 浩

第六号 (一九九九)

デカルトにおける『真理』と『存在』
倉田 隆

——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論
山脇 雅夫

——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理
次田 憲和

——「他者構成論」理解のための一視座——
シエリング哲学の出発点
浅沼 光樹

——人間の理性の起源と歴史の構成——
自由の軌跡
北岡 武司

第七号 (二〇〇〇)

——菌田 坦教授 退官記念号——
菌田 坦教授 略歴・業績一覽

《講演》
近世哲学における神の問題
菌田 坦

近世哲学とはなににか
福谷 茂

——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭
武藤 整司

——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味
山脇 雅夫

——『精神の現象学』緒論における
知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考
橋本 武志

——可能性概念を手がかりに——
生と音楽
折橋 康雄

——デイルタイに於ける
生と音楽の時間性的問題をめぐって——
自由の軌跡
北岡 武司

——批判哲学における
自由の可能性の意味——
認識か解釈か
福谷 茂

——新しい哲学史像のために (二)——
G・ハーマン相対主義説の論理
田中 一馬

歴史的理性の生成
浅沼 光樹

——シエリング『悪の起源』における
神話解釈の意義——
《書評》
北岡武司著『カントと形而上学―物自体と
自由をめぐって』
橋本 武志

N・ケンブ・スミス著(山本冬樹訳)『カン
ト『純粹理性批判』註解』
長田 藏人

第九号 (二〇〇一)

『存在と時間』と哲学の方法(形式的挙示
再考)
田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生
榎原 哲也

ワイトゲンシュタインの「規則に従う」論
の若干の考察
子野日俊夫

復古のもとでの立憲主義
竹島あゆみ

——ヘーゲル法哲学講義(ベルリン
一八一九/二〇年)の二つの講義録——
《書評》
ヤーコプ・ペーメ著(菌田坦訳)『アウロー
ラー明け初める東天の紅』
福谷 茂

第一〇号 (二〇〇三)

十年の歩みを顧みて

菌田 坦

デカルトと自覚の問題

実川 敏夫

——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐる

高田 珠樹

——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節 (decorum) の意義

福田喜一郎

——クリスチャン・トマージウスにおける

法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」

西川小百合

——カントの道徳判断論の

新しい理解を目指して——

《書評》

福居 純著『デカルト研究』

浅沼 光樹

第二一号 (二〇〇四)

カントにおける崇高の経験

牧野 英二

イデオロギー批判の技術哲学 橋本 武志

——マルクーゼ・ハーバーマス論争を

手掛かりに——

感性の弁護 (Apologie für die Sinnlichkeit)

とは何か

長田 蔵人

——カントの「直観」概念の

見過ごされたアスペクト——

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

——その内実と意義——

千葉 清史

《書評》

武藤整司著『人間の輪郭——共生への理念』

吉川 康夫

第二二号 (二〇〇五)

形而上学的認識と超越論的認識

大橋容一郎

——カントと認識の形而上学・序論——

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか

沖永 莊八

——私に付属する性質が消去された視点

からの考察——

反現象学の道

次田 憲和

——フランク・ブレンターノにおける非超越

論的現象学と個体主義的存在論に基づく

直接実在論的認識論について——

超越論的反省とは何か

佐藤 慶太

——「反省概念の二義性」章の三段構造と

その意味——

編集委員会

委員長

小林 道夫

委員

福谷 茂

長田 蔵人

佐藤 慶太

執筆者紹介

石川 文康 東北学院大学教授
多田 光宏 苫小牧工業専門学校准教授
佐藤 慶太 近畿大学豊岡短期大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第13号

2007年3月31日 発行

編集・発行 京都大学近世哲学研究刊行会
編集代表 小林 道夫
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>
TEL (075) 753-2444

印刷所 協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL (075) 312-4010(代)

定価 1200円(本体 1143円)

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 13

《Articles》

Fumiyasu ISHIKAWA : Von der Kritik des Satzes vom Grund zur Vernunftkritik 1
—— Zum Ursprung der ‚apriorischen Synthesis‘ ——

Mitsuhiro TADA : Über die Einführung des Begriffs
des ‚Willens als Dinges an sich‘ bei Schopenhauer 20
—— Zur Kompatibilität der Verneinung
des Willens und der Moral ——

《Review Article》

Keita SATO : Drei Neue Übersetzungen der *Kritik der reinen Vernunft* 36

2006

Published by
The Society for the Publication of
STUDIES IN MODERN PHILOSOPHY
at Kyoto University